

垂直のコンクリート壁の隙間に侵入して生育する植物

石 沢 進

土地の面積確保や利用の効率を高めるために、垂直のコンクリート壁を設置している所がある(写真1・2)。中魚沼郡津南町の芦ヶ崎入り口付近に建設した道路沿いに、垂直のコンクリート壁を付設し、道路の法線を広く確保している。そのコンクリート壁の隙間に生えている植物について、短時間ではあるが、観察する機会(2005年10月)があったので、その種と生育状況を記録する。

植物の生育環境として垂直のコンクリート壁は決して良好な状況ではなく、むしろ劣悪な条件である。コンクリート壁に注がれる太陽光線は強く、一時的に高温にさらされる機会も多いと思われる。水分は地下からの供給がほとんどであり、雨水に依存することは少ない。このような条件であるから、侵入する植物も限られている。しかし、一旦根をおろした植物は、他種との太陽光線の奪い合いは少なく、かなり順調に生育している種もある。一般的傾向としては、普通日陰に生育しているシダ植物の種数が多く、種子植物は少ない。

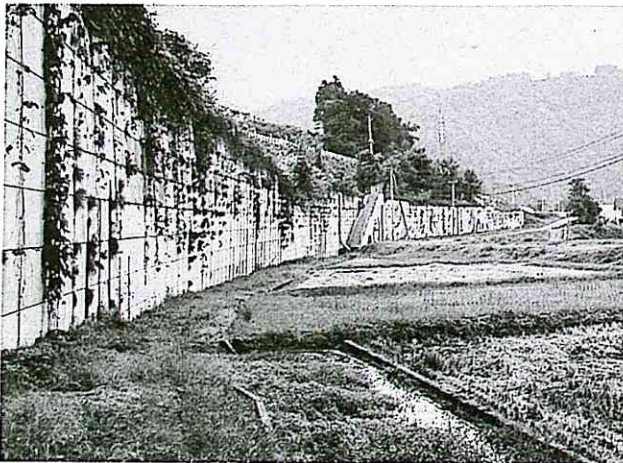


写真1 コンクリート垂直壁（東側から西側を見る）

コンクリート壁の隙間に生える植物と生育状況
〔シダ植物〕

スギナ：津南町のコンクリート壁では、最も量的に多く生育している。隙間の上から下まで連続して生えている所もある。(写真3)

オクマワラビ：常緑性で暖温帯に多い種であるが、このコンクリート壁では、各所に点在しているが、大株に成長している個体は少ない。

(写真4)

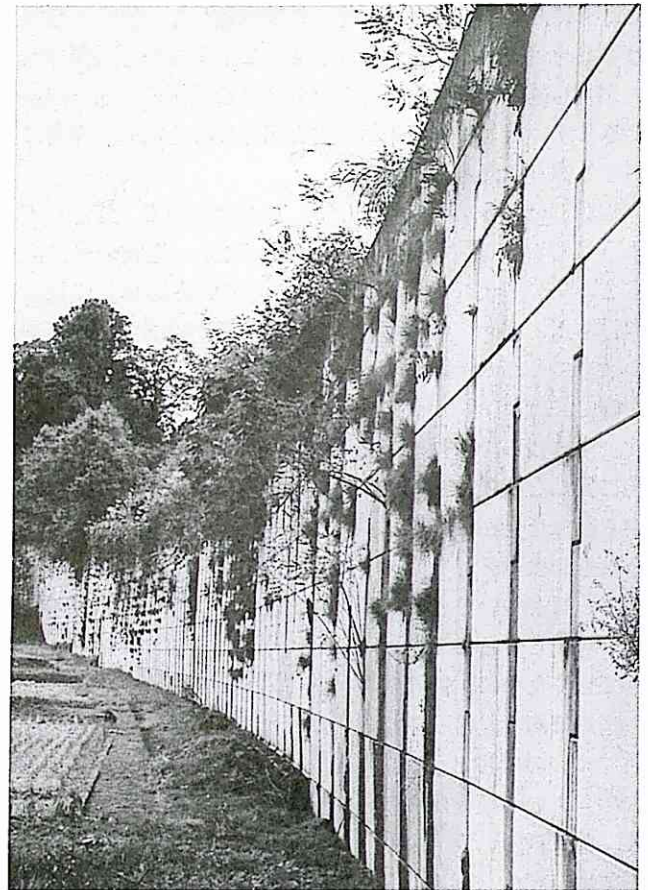


写真2 コンクリート垂直壁（西側から東側を見る）

イヌワラビ：夏緑性のシダで田圃の畦や石垣の間など普遍的に見られる種である。このコンクリート壁では所々にみられる。(写真5)

ヒメシダ：夏緑性のシダでやや湿った環境の所に群生するが、この隙間にもやや群がって生えている所もある。(写真6)

ナライシダ：夏緑性のシダで普通樹林の下に生育している種であるが、ここでは垂直の壁に生えている。個体数は少ない。(写真7)

サカゲイノデ：夏緑性のシダで普通種であるが、ここでは少ない。(写真8)

ゲジゲジシダ：夏緑性で暖温帯に多い種であり、津南地方では、湿った岸壁に稀に生育している。ここでの生育の個体数は少なく、良好な生育状況ではない。しかし、このような劣悪な条件でも生育していることは興味深い。

(写真9)

〔種子植物〕

ヨモギ：付近に普通に生えているが、ここで生育している個体数は少ない。(写真 10)

セイヨウタンポポ：人里に普通にみられるが、ここではわずかに生育している。(写真 11)

フキ：普通に見られる草本であり、ここでに生育する種としては個体数が多く、所によっては良好に生育している。(写真 12)

ススキ：付近に普通に生えているが、ここで生育している個体数は少ない。(写真 13)

ボタンヅル：つる性の植物で、隙間に生えた個体が大きく育ち、下方に垂れ下がって生育している所もある。(写真 14)

タケニグサ：付近に普通に生えているが、ここで生育している個体数は少ない。(写真 14)

キリ：このような条件に生育する木本は少ないがその一種である。まだ侵入したばかりで、背丈も低い。(写真 15)

ヤマグワ：ここでは個体数が少なく、生育も良好ではない。(写真 15)

クズ：隙間に直接芽生えたものでなく、壁の上部に根をおろし、つるだけが壁面に垂れ下がっている。

上記以外にコケ植物がわずかに生育している所もある(写真 16)。植物の生育条件としては劣悪ではあるが、コケ類やシダ類が侵入して生育している様相は、荒廃地に形成される植物群落の初期状態に類似しているようでもある。

コンクリート壁が建設されて間がないから、すぐには問題にならないであろうが、壁面の植物が繁茂することにより、将来どのようなようになるか、関心のあるところである。

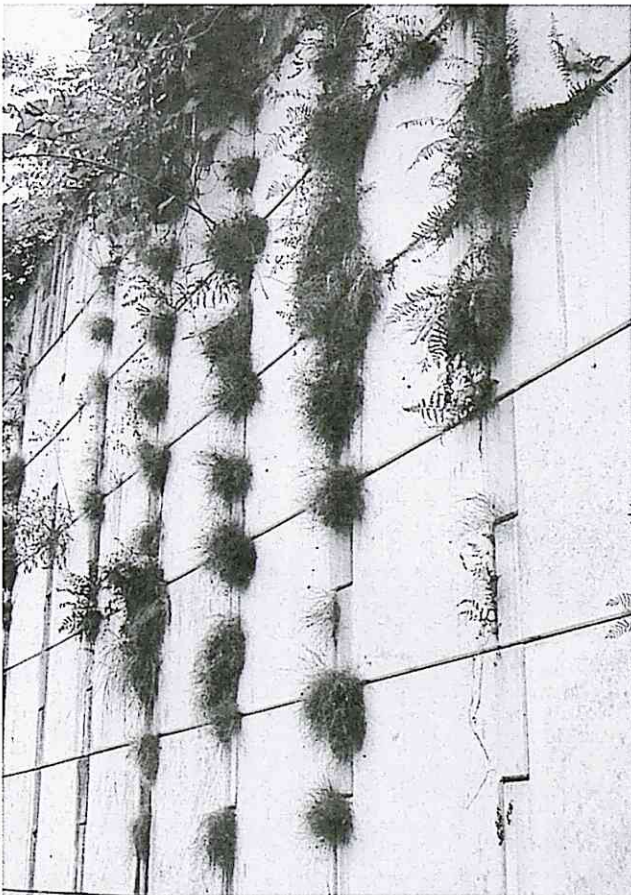


写真 3 スギナの群生



写真 4 オクマワラビ

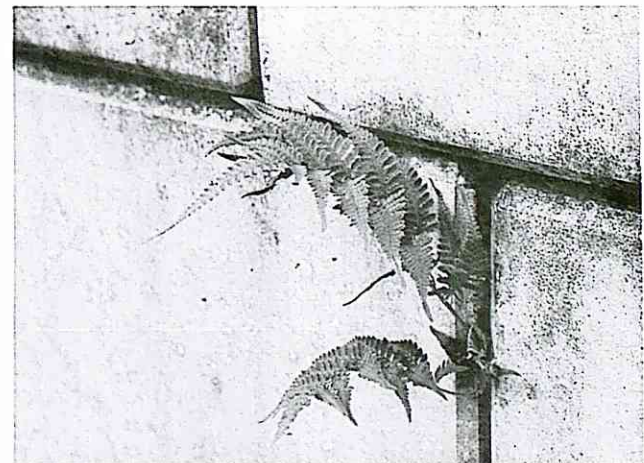


写真 5 イヌワラビ



写真6 ヒメシダ

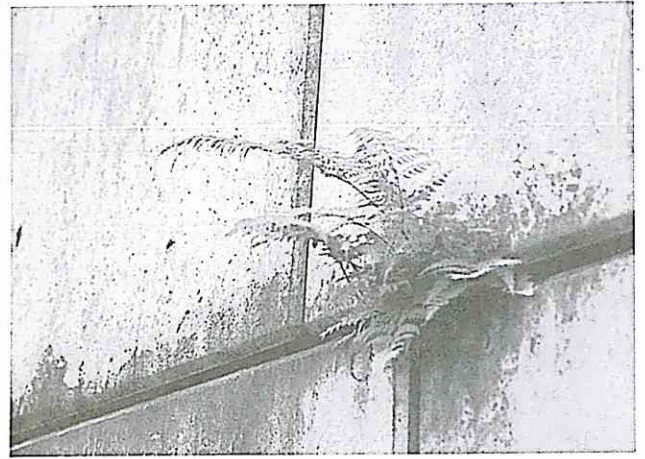


写真7 ナライシダ



写真8 サカゲイノデ (中央)

新 潟 日 報

2005年(平成17年)10月24日(月曜日)

日報抄

旧山古志村は百万年以上前は海の底だった。あの奥深い山並みの歴史が、一千五百万年前に誕生したといわれる人類の歩みよりも短いことに驚く。

▼山を隆起させ、がけを崩す。ダイナミックな大地の営みの中で中越地震は起きた。震災から一年、山古志に入るとこの復旧したのだらうと思わせるほど、つめ跡が生々しい。斜面が次々と滑り落ちた山並みは、緑と土色のまだら模様になっている。▼集落を結ぶ道は幸るところで崩落し、民家やガードレールががけ下に

落ちたまま。山が動き、川をせき止めた東竹沢の土砂崩れダム現場を眼下ろす高台に立った。水に沈む姿がテレビで何度も放映された新築の和風住宅が一部泥に埋まりながら、秋の日差しを浴びていた。▼高台のがけは、今も雨が降ると崩れるのだらう。むき出しの地肌が荒々しい。流れ出した土砂で、土砂崩れダム現場は三秒もの「平地」に変わ

りつつある。姿ぼうを統ける大地が招く災害はさまざま。一方で、地滑りや土砂崩れは土壌をかき乱し、地力を回復するといふ。耕作面積を広げてもくくれる。▼そうした大

地に生かされて、山古志の人々は歴史を刻み文化をはぐくんできた。山道で多くの村人に出会った。地元野菜のカグラナンパンを自慢し、南米原産のヤーコンを収穫しながら特産化の夢を語る。その近くで、北海道や東北のナンバーを付けた工用車両がうなりをあげていた。▼中越地震で被災した中山間地が日本の原風景といわれる静かなたたずまいを取り戻すには、長い時間と膨大な力を要するのだらう。道端でアキノキノソウが黄色い花をつけていた。やがて二度目の冬が来る。

新 潟 日 報

2005年(平成17年)9月29日(木曜日)

日報抄

「檀流クッキング」で知られる作家の榎一雄さんは九歳のときに母が家出をしたために、父や妹の食事を作らなければならなくなった▼スーパーもコンビニもない時代、レトルト食品や市販の総菜に頼ることはできず、しちりんやかまどで煮炊きする。さぞ大変だったと思うが、かたくり粉であんかけ風にとろみをつけることを覚えたときのうれしさといったらなかった。

▼学校で難問を解くよりも、はるかに達成感があったのだらう。東北大学の川島隆大教授と

大阪ガスの研究が話題を呼んでいる。ホットケーキを焼くときの子どもを最新の機器で観察したところ、創造力や記憶に働いていた▼大人も同じであった。計算問題に挑むときよりも、脳は生き生きと活動する。料理は脳を鍛え、老化防止や子どもの情緒安定に効果があるといわれる。食べ物を煮たり焼いたりする動物は人間だけである。料理が人間の脳の進化に大きな役割を果たしてきたことは間違いない▼細文人の主食でもあったトチの栗の料理法が頭に浮かぶ。トチの栗には非水

溶性の厄介なあくがある。あくが遠くなるほど手間がかかる水さらしや灰を使ったあく抜きの手順を、遠い祖先は試行錯誤の末に考え出していた。トチの栗の団子やもちが本場においしい。郷土料理には、何千年もの知恵が凝縮されている。食が「文化」といわれるゆえんだらう▼大阪ガスは、外食などの影響で家庭で火を使っている調理する機会が減っていることに危機感を抱いて共同研究に取り組んだ。栗の秋。家族で手作り料理を楽しみ、食材の成分表には表せない栄養を吸収したい。

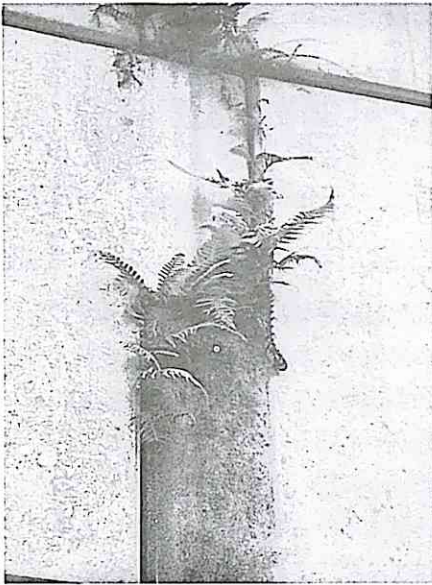


写真9 ゲジゲジシダ



写真10 ヨモギ

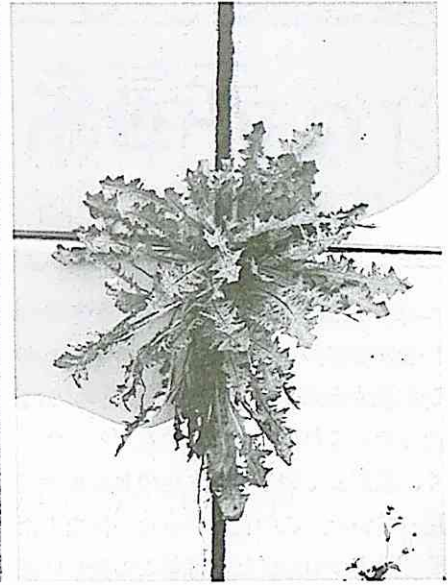


写真11 セイヨウタンポポ

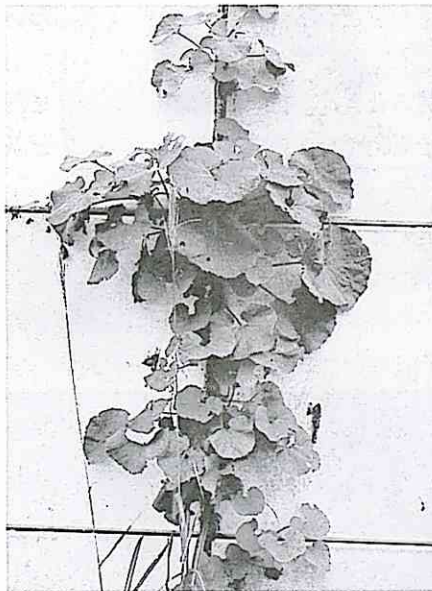


写真12 フキの群生



写真13 ススキ

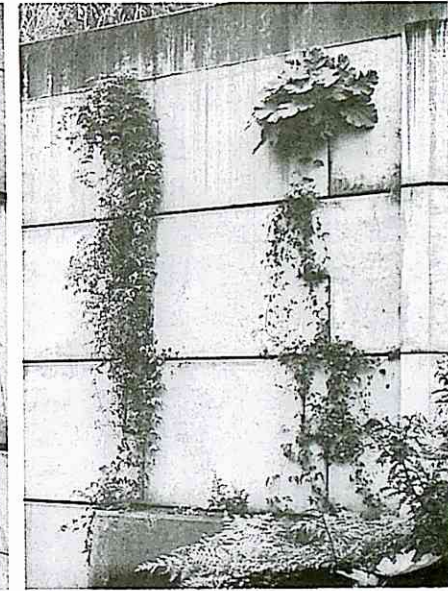


写真14 ポタンヅル(左)とタケニグサ(右)

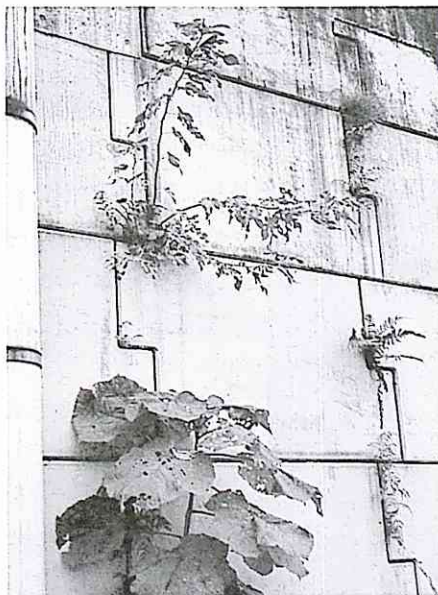


写真15 キリ(下)とヤマグワ(上)

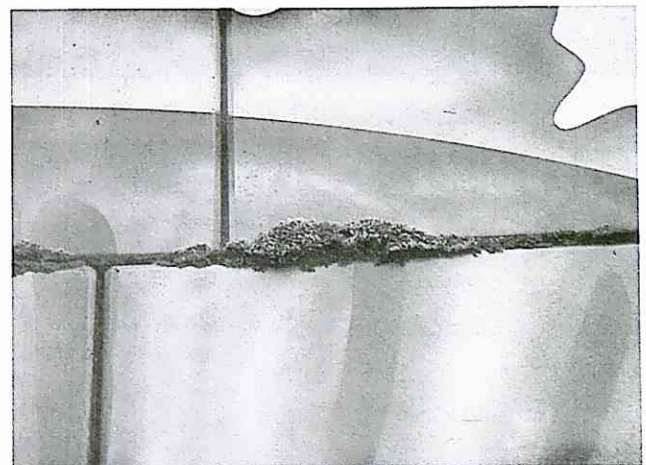


写真16 コケ植物